

6 3 6 1 - 1 2 6 8  
平成 2 2 年 1 1 月 2 6 日

各関係機関の長  
各病虫害防除員 殿

宮崎県病虫害防除・肥料検査センター 所長

平成 2 2 年度病虫害発生予報第 8 号について  
平成 2 2 年度病虫害発生予報第 8 号を発表したので送付します。

## 平成 2 2 年度病虫害発生予報第 8 号

向こう 1 か月間における農作物の主な病虫害の発生動向は、次のように予想されます。

### 発生予報の概要

作物名	病虫害名	発生量の 平年比	記載 ページ
施設果菜類	1 病害一般		2
	2 タバココナジラミ類	並	2
冬春きゅうり	1 べと病	やや少	2
	2 うどんこ病	並	3
	3 褐斑病	並	3
	4 灰色かび病	並	3
	5 黄化えそ病 (MYSV)		3
	6 ミナミキイロアザミウマ	並	3
	7 病虫害全般 (改植時の留意点)		4
冬春ピーマン	1 斑点病	並	4
	2 うどんこ病	やや少	4
	3 黒枯病	前年より多い	4
	4 アザミウマ類	やや多	5
冬春トマト	1 葉かび病	並	5
	2 トマト黄化葉巻病 (TYLCV)	前年、前々年より少ない	5
	3 タバココナジラミ類	並	5
	4 ハモグリバエ類	やや少	6
冬春いちご	1 うどんこ病	やや多	6
	2 炭疽病	多	6
	3 ハダニ類	やや少	6
	4 アブラムシ類	やや多	6
かんきつ類 (露地栽培)	1 ミカンハダニ	並	7
茶	1 カンザワハダニ	並	7

### 作物の生育状況 (11月中旬)

11月中旬の冬春きゅうりは生育初期～収穫初期、冬春ピーマンは収穫期、冬春トマトは収穫前～初期、冬春いちごは収穫前、うんしゅうみかんはほぼ収穫終了、日向夏は果実肥大期、茶は秋整枝後であった。

### 向こう1か月の気象予報

天気は平年と同様に晴れの日が多く、気温は平年より低い確率40%、降水量、日照量はともに平年並の確率40%と予想されています。

(1か月予報 鹿児島地方気象台11月19日発表)

## 発生予報の根拠および防除対策

### 施設果菜類

#### 1 病害一般

[ 防除上の注意 ]

- ( 1 ) 気温の変化等には細心の注意を払い、施設内の温湿度管理を徹底する。特に、コスト低減のため、ハウスサイドや内ホコを多層被覆にしているところでは、施設内が多湿になりやすく、病害の発生が助長される傾向があるので注意する。  
また、多発してからでは防除効果が劣るので、初期防除を徹底する。  
きゅうり：べと病、褐斑病、灰色かび病、菌核病、斑点細菌病など  
トマト：疫病、灰色かび病、菌核病、葉かび病、すすかび病など  
ピーマン：灰色かび病、菌核病、斑点病、黒枯病など

#### 2 タバココナジラミ類（タバココナジラミバイオタイプQ、シルバーリーフコナジラミ）（並）

[ 予報の根拠 ]

- ( 1 ) 冬春きゅうりでの発生面積率40.0%（平年38.4%）、100葉当たり虫数2.4頭（平年3.4頭）はいずれも平年並である。
- ( 2 ) 冬春ピーマンでの発生面積率57.1%（H21 33.3% H20 30.8%）、100葉当たり虫数2.9頭（H21 1.0頭 H20 1.5頭）はいずれも前年、前々年より多い。
- ( 3 ) 冬春トマトでの発生面積率53.9%（平年43.4%）、100葉当たり虫数2.8頭（平年3.9頭）はいずれも平年並である。

[ 防除上の注意 ]

- ( 1 ) タバココナジラミバイオタイプQとシルバーリーフコナジラミの形態上の差異は、肉眼での識別は困難である。
- ( 2 ) 施設開口部に防虫ネット（0.4mm目以下）を必ず設置するとともに、光反射マルチや近紫外線カットフィルム等の物理的防除手段を利用する。
- ( 3 ) 黄色粘着トラップ等を設置し、タバココナジラミ類の早期発見に努めるとともに、栽培期間中を通して防除を徹底し、本虫の密度を抑制する。
- ( 4 ) タバココナジラミバイオタイプQに効果のある殺虫剤が少ないことから、発見したら早めに防除し、薬剤散布後は防除効果に注意を払い、必要に応じて適宜追加防除を行う。
- ( 5 ) 施設内外の雑草はコナジラミ類の寄主となるので除草を徹底する。また、施設内では栽培目的以外の不要な作物や観葉植物等は栽培しない。
- ( 6 ) 有効な薬剤に対する抵抗性の発現を回避する観点から、同一及び同一系統の薬剤の連用は極力避け、ローテーション散布を心がける。また、抵抗性発現の可能性が低い微生物農薬やコナジラミ類を物理的に窒息死させる気門封鎖剤を防除体系に組み込む。

### 冬春きゅうり

#### 1 ベと病（やや少）

[ 予報の根拠 ]

- ( 1 ) 11月中旬の発生面積率15.0%（平年27.8%）、発病葉率1.7%（平年2.6%）はいずれも平年よりやや少である。

[ 防除上の注意 ]

- ( 1 ) 湿度が高いときに多発しやすく、多発すると防除が困難となるので予防散布に重点をおき、発生が見られたら初期防除を徹底する。
- ( 2 ) 窒素切れや草勢の衰えは発生を助長するので、肥料切れしないように適正な肥培管理に努める。

## 2 うどんこ病 (並)

[ 予報の根拠 ]

- ( 1 ) 11月中旬の発生面積率25.0% ( 平年45.0% ) は平年よりやや少、発病葉率0.9% ( 平年4.9% ) は平年より少である。
- ( 2 ) 向こう1か月の降水量は、平年並の確率40%と予想されている。

[ 防除上の注意 ]

- ( 1 ) 病勢が進展してからでは防除効果が低くなるので、発病を確認したら早めに防除する。
- ( 2 ) 薬剤耐性菌が出現しやすいので、同一系統薬剤の連続散布は避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。
- ( 3 ) 乾燥時に多発するので、ほ場が過乾燥にならないように管理に注意する。

## 3 褐斑病 (並)

[ 予報の根拠 ]

- ( 1 ) 11月中旬の発生面積率5.0% ( 平年7.3% )、発病葉率0.2% ( 平年1.8% ) はいずれも平年よりやや少である。
- ( 2 ) 向こう1か月の降水量は、平年並の確率40%と予想されている。

[ 防除上の注意 ]

- ( 1 ) 多発してからの防除は困難なので、初期防除を徹底する。
- ( 2 ) 窒素質肥料の多用は発病を助長するが、逆に少ないと草勢の低下を招くので、適正な肥培管理に努める。
- ( 3 ) 下葉の老化した発病葉は、ほ場外に持ち出し処分する。

## 4 灰色かび病 (並)

[ 予報の根拠 ]

- ( 1 ) 11月中旬の巡回調査では発生未確認である。  
( 平年：発生面積率、発病果率はいずれも0.0% )
- ( 2 ) 向こう1か月の降水量は、平年並の確率40%と予想されている。

[ 防除上の注意 ]

- ( 1 ) 曇雨天が続く時は、日中でも加温機を稼働させるなど除湿に努める。
- ( 2 ) 発生初期の防除を徹底する。なお、薬剤耐性菌が出現しやすいので、同一系統薬剤の連続散布は避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。

## 5 黄化えそ病 (MYSV)

[ 防除上の注意 ]

- ( 1 ) 本病が一部の施設栽培で確認され、今後感染の拡大が懸念されるため嚴重な警戒が必要である。
- ( 2 ) 本病はミナミキイロアザミウマによって永続的に伝搬されるため、発生後は急激に圃場内外に蔓延する恐れがある。ミナミキイロアザミウマの防除対策については、次項を参照のこと。
- ( 3 ) 感染株を確認した場合は、速やかに罹病株を抜き取り、圃場外に持ち出し埋却処分するか、ビニール袋等に入れて完全に枯れるまで密封処理する。
- ( 4 ) 本病と疑われる症状が発生した場合は、西臼杵支庁・農林振興局 ( 農業改良普及センター ) または病害虫防除・肥料検査センターまで連絡する。
- ( 5 ) 改植時には、後述「7病害虫全般 ( 改植時の留意点 ) 」を参照のこと。

## 6 ミナミキイロアザミウマ (並)

[ 予報の根拠 ]

- ( 1 ) 11月中旬の巡回調査では、20ほ場のうち5ほ場で微発生<sup>(注)</sup> ( 葉当たり0.5頭以下 ) が確認された。

[ 防除上の注意 ]

- ( 1 ) 本虫は、黄化えそ病を媒介するので早期発見に努め、防除の徹底に努める。
- ( 2 ) 最近、本病を媒介するミナミキイロアザミウマに対し、各種薬剤の感受性低下が

確認されており、多発してからでは防除が難しくなるので、低密度のうちに防除する。

- (3) 施設サイド及び谷部に0.4mm目合いの防虫ネットを設置するとともに、施設周囲に光反射資材(少なくとも70cm幅以上)を設置し、施設への媒介昆虫侵入を抑制する。なお、光反射資材は種類によって防除効果が異なるので、関係機関に問い合わせる。
- (4) 本虫の土中や地表面での蛹化を防止するためのマルチ被覆や誘殺のための粘着板の設置等、総合的な防除対策を講じる。
- (5) 施設内及び圃場周囲の除草を徹底し、媒介昆虫の生息・増殖を抑制する。
- (6) 残さはハウス外に持ち出し埋却する。やむを得ず埋却できない場合は、残さをビニールで完全に覆い本虫の拡散を防止する。いずれの場合も処分地周囲に粘着板を設置する。

## 7 病害虫全般(改植時の留意点)

[ 防除上の注意 ]

- (1) ウイルス病を媒介するコナジラミ類やミナミキイロアザミウマに対しては、以下のことに留意し、次作の発生源を絶つように努める。
  - 前作きゅうりの栽培を終了する前に、殺虫剤を7日間隔で3回散布する。
  - 栽培を終えたら、ハウス内の除草を徹底するとともにきゅうりを完全に抜根する。
  - 抜根後約10日間蒸し込む。
  - 蒸し込み期間中は、粘着板を設置し成虫を捕殺する。
  - 後作きゅうりの定植時には、必ず粒剤を施用する。
- (2) 前作に褐斑病などの発生があった場合には特に注意し、定植後直ちに予防防除し感染を防ぐ。

## 冬春ピーマン

### 1 斑点病 (並)

[ 予報の根拠 ]

- (1) 11月中旬の巡回調査における発生面積率7.1%( 平年17.6% )は平年並、発病葉率0.1%( 平年0.4% )は平年よりやや少である。
  - (2) 向こう1か月の降水量は、平年並の確率40%と予想されている。
- [ 防除上の注意 ]
- (1) 多湿条件で発生した場合、被害が大きくなるので除湿に努める。
  - (2) 病原菌が侵入した後の防除効果は低いので、予防散布を行う。

### 2 うどんこ病 (やや少)

[ 予報の根拠 ]

- (1) 11月中旬の発生面積率14.3%( 平年48.0% )、発病葉率0.3%( 平年3.9% )はいずれも平年より少である。
- [ 防除上の注意 ]
- (1) 乾燥した条件で発生しやすいので、過乾燥に注意する。
  - (2) 病勢が進展してからでは防除効果が低いので、早期発見に努め、発病を確認したら早めに防除する。

### 3 黒枯病 (前年より多い)

[ 予報の根拠 ]

- (1) 11月中旬の発生面積率14.3%( H21 6.7% H20 23.1% )、発病葉率1.1%( H21 0.2% H20 1.4% )は前年より多い。
- [ 防除上の注意 ]

- ( 1 ) 圃場内が多湿にならないように換気に努め、排水を良好にするとともにマルチなどを行う。
- ( 2 ) 多発してからでは防除効果が上がりにくいので、予防・初期防除に重点をおく。
- ( 3 ) 被害茎葉、果実は伝染源となるので、圃場外に持ち出し適切に処分する。

#### 4 アザミウマ類 ( やや多 )

[ 予報の根拠 ]

- ( 1 ) 11月中旬のミナミキイロアザミウマの発生面積率57.1% ( 平年46.6% )、10花当たり寄生虫数4.1頭 ( 平年2.2頭 ) はいずれも平年よりやや多である。
- ( 2 ) 11月中旬のヒラズハナアザミウマの発生面積率50.0% ( 平年28.7% )、10花当たり寄生虫数6.7頭 ( 平年2.1頭 ) はいずれも平年より多である。

[ 防除上の注意 ]

- ( 1 ) ミナミキイロアザミウマは、10花当たりの寄生虫数が1頭から被害果が出始めるので、発見したら早めに防除する。
- ( 2 ) ヒラズハナアザミウマの発生が多い状況であり、生息密度が高まると被害が発生するので注意が必要である。
- ( 3 ) 卵・幼虫・蛹・成虫が混在しており、卵と蛹には防除効果が低いので、7日間隔で2~3回の連続した防除を行う。
- ( 4 ) 両アザミウマの薬剤感受性は異なるので、防除の際は使用する農薬に留意する。
- ( 5 ) 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、同一系統薬剤の連用は避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布に努める。
- ( 6 ) 被害の激しい茎葉・果実のハウス外への持ち出し、マルチ被覆、青色粘着板の設置により生息密度の低下を図る。

### 冬春トマト

#### 1 葉かび病 ( 並 )

[ 予報の根拠 ]

- ( 1 ) 11月中旬の巡回調査では発生未確認である。  
( 平年値 : 発生面積率1.9%、発病葉率0.02% )

[ 防除上の注意 ]

- ( 1 ) 多湿条件で発生しやすいので、ハウスの換気を良くする。
- ( 2 ) 発病初期の防除を徹底する。

#### 2 トマト黄化葉巻病 ( TYLCV ) ( 前年、前々年より少ない )

[ 予報の根拠 ]

- ( 1 ) 11月中旬の巡回調査では、13圃場のうち4圃場で微発生<sup>(注)</sup> ( 発生株率0.5%未満 ) を確認している。  
( 発生面積率 H21 16.7% H20 25.0%、発病株率 0.08% H20 0.63% )

[ 防除上の注意 ]

- ( 1 ) タバココナジラミ類の防除を徹底する。
- ( 2 ) 発病株は伝染源になるので根ごと抜き取り、土中に埋めるかビニル袋に入れて枯れるまで密閉する。ウイルスは植物全体に存在しているので発病部位を除去しても伝染源になるため、必ず株全体を除去する。

#### 3 タバココナジラミ類 ( タバココナジラミ ハイタイ Q、シルバーリーフコナジラミ ) ( 並 )

[ 予報の根拠 ]

- ( 1 ) 11月中旬の発生面積率53.9% ( 平年43.4% )、100葉当たり虫数2.8頭 ( 平年3.9頭 ) はいずれも平年並である。

[ 防除上の注意 ]

( 1 ) 施設野菜一般のタバココナジラミ類 ( 2 ページ ) を参照のこと。

#### 4 ハモグリバエ類 ( やや少 )

[ 予報の根拠 ]

( 1 ) 11月中旬の発生面積率23.1% ( 平年36.7% )、寄生葉率0.7% ( 平年2.2% ) はいずれも平年よりやや少である。

[ 防除上の注意 ]

( 1 ) 多発してからの防除効果は低いので、初期防除に努める。

### 冬春いちご

#### 1 うどんこ病 ( やや多 )

[ 予報の根拠 ]

( 1 ) 11月中旬の発生面積率46.2% ( 平年33.5% )、発病葉率8.1% ( 平年4.6% ) はいずれも平年よりやや多である。

[ 防除上の注意 ]

( 1 ) 葉裏に発生しやすいので、早期発見に努め初期防除を徹底する。

( 2 ) 多発すると防除効果が低くなるので予防に重点をおき、発病後は散布間隔を短くするなど発病初期の防除を徹底する。

( 3 ) 発病果など被害部は伝染源になるので、早めに取り除き圃場内に放置しない。

#### 2 炭疽病 ( 多 )

[ 予報の根拠 ]

( 1 ) 11月中旬の発生面積率38.5% ( 平年9.7% )、発病株率2.4% ( 平年0.3% ) はいずれも平年より多である。

[ 防除上の注意 ]

( 1 ) 多湿にならないよう、ほ場の排水対策を十分行う。

( 2 ) 発病した株は早期に除去し、新たな感染を防止する。

( 3 ) 次作の親株には、炭疽病及び萎黄病の未発生圃場からの苗を用意する。

#### 3 ハダニ類 ( やや少 )

[ 予報の根拠 ]

( 1 ) 11月中旬の巡回調査では発生面積率15.4% ( 平年32.5% ) は平年よりやや少、寄生株率1.1% ( 平年10.1% ) は平年より少である。

[ 防除上の注意 ]

( 1 ) 収穫期に入り、寄生数が増加してからの防除は困難なので、低密度時から防除を徹底する。

( 2 ) 株整理後、葉数が少なくなった時期に薬剤散布を行うと防除効果が高くなる。茎葉繁茂時には散布圧を強めて、葉裏に良くかかるように散布する。

( 3 ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のロ - テ - ション散布を実施する。

#### 4 アブラムシ類 ( やや多 )

[ 予報の根拠 ]

( 1 ) 11月中旬の発生面積率38.5% ( 平年26.9% ) は平年並、寄生株率4.3% ( 平年3.1% ) は平年よりやや多である。

[ 防除上の注意 ]

( 1 ) 開花期に薬剤を使用する場合は十分注意し、ミツバチに影響の少ない薬剤を寄生株とその周辺に部分散布する。

( 2 ) 株整理後、葉数が少なくなった時期に薬剤散布を行うと防除効果が高くなる。茎

葉繁茂時には散布圧を強めて、葉裏に良くかかるように散布する。

## かんきつ類(露地栽培)

### 1 ミカンハダニ (並)

[ 予報の根拠 ]

( 1 ) 11月中旬の発生面積率55.0% ( 平年52.3% ) は平年並、寄生葉率6.4% ( 平年14.3% ) は平年よりやや少である。

[ 防除上の注意 ]

( 1 ) 冬季のマシン油乳剤の防除効果は高いので実施する。

## 茶

### 1 カンザワハダニ (並)

[ 予報の根拠 ]

( 1 ) 11月中旬の発生面積率38.5% ( 平年40.0% )、寄生葉率1.4% ( 平年2.2% ) はいずれも平年並である。

[ 防除上の注意 ]

( 1 ) 冬季のマシン油乳剤の防除効果は高いので実施する。

( 注 ) 微発生とは、生息が確認されるが発生面積として換算する基準値に達しない密度の発生状況をいう。

### その他

1 農薬適用の有無などについては次のホームページで確認する。

日本植物防疫協会ホームページ <http://jppn.ne.jp>

農林水産省ホームページ <http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/>

農林水産消費安全技術センターホームページ

<http://www.acis.famic.go.jp/>

2 農薬の使用に当たっては、農薬使用基準の遵守並びに危被害の発生防止に努める。

3 発生量(程度)の区分

多	い	( 高	い )	やや多いの外側 10% の度数の入る幅
やや多	い	( やや高	い )	平年並の外側 20% の度数の入る幅
平年並				平年値を中心として 40% の度数の入る幅
やや少	ない	( やや低	い )	平年並の外側 20% の度数の入る幅
少	ない	( 低	い )	やや少ないの外側 10% の度数の入る幅 ( 平年値は過去 10 年間の平均 )

4 予察情報の種類

病虫害防除・肥料検査センターから発表する情報は次の5つです。

( 1 ) 予 報・・・向こう1か月の発生状況を予測し、毎月25日前後に発表する。

( 2 ) 注 意 報・・・主要な病虫害の多発生が予想され、かつ早めに防除が必要な場合に発表する。

( 3 ) 警 報・・・主要な病虫害の大発生が予想され、かつ緊急に防除が必要な場に発表する。

( 4 ) 特 殊 報・・・県内で初めて発生を認めた病虫害がある時や、病虫害の発生様相が特異な時に発表する。

( 5 ) 防除情報・・・注意をうながす必要がある病虫害の発生状況や、各種の防除技術指導情報について随時発表する。

## お知らせ

病虫害防除・肥料検査センターでは、ホームページで情報を提供しています。  
ホームページアドレスは、<http://www.jppn.ne.jp/miyazaki/>です。

### 【問い合わせ先】

病虫害防除・肥料検査センター 生頼

TEL:0985-73-6670 FAX:0985-73-7499

E-mail : byogaichu-hiryo

@pref.miyazaki.lg.jp